

なかごおり
中郡遺跡群は、出水市に所在し、発掘調査の結果、12世紀後半から13世紀を中心とした中世の屋形跡などが発見されました。

出土した遺物には、地元産の土師器などに加え、中国の龍泉窯系の青磁や白磁など、多くの貿易陶磁器が見られます。中でも、龍首水注は景德鎮産と見られており、かなり大きな力をもつ人物がいたと考えられます。

また、南さつま市に所在する芝原遺跡では、水注や水瓶などに装飾される龍首部分が出土しています。これらの出土品からも、海を越えた大陸との交流が盛んだったことが分かります。



中郡遺跡群（出水市）出土の龍首水注



芝原遺跡（南さつま市）出土の水瓶などに装飾される龍首部分

文字がもたらす文化

律令制と文字や書類

7世紀には、いわゆる行政改革の機運が高まり、中国の行政制度を取り入れるようになります。この時代になると、政府の役人も、国（現在の県に相当）や郡（現在の市町村に相当）の役人も、書類を作って仕事をすることになりました。読み書きは、役人に必須の素養となったのです。

大隅国府推定地の近くにある気色の杜遺跡（霧島市）では、和歌が“かな”で書かれた土器片が出土しました。年代は、平安時代のもと考えられています。漢字ではなく、“かな”が用いられていること、和歌が詠まれていることなどから、中央の文化が大隅国へ伝わっていることが分かります。



気色の杜遺跡（霧島市）出土の墨書土器（霧島市教育委員会蔵）



京田遺跡出土（薩摩川内市）の木簡（レプリカ）

【京田遺跡出土木簡】

役人たちは、書類を作って仕事をすることになりますが、文字や文章を書き記すのに、紙だけではなく、木も用いられました。文字や文章が記された木の札を木簡と言います。

平成12年度に行われた発掘調査で出土した木簡は、平安時代初めの嘉祥3年（850年）3月14日の日付が記されており、郡の役人が、田の権利に関する内容を告知したものと考えられています。



領内より琉球までの里程図（阿久根市教育委員会蔵） 島を渡って交易していた様子がわかります。



企画展データファイル 39

2014.4.18. ~ 2014.7.6.

お問い合わせ

(公財)鹿児島県文化振興財団
上野原縄文の森
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森1-1
TEL 0995-48-5701 FAX 0995-48-5704
URL <http://www.jomon-no-mori.jp>
E-mail uenohara@jomon-no-mori.jp

明らかにした 郷土の歴史と文化
～出土品からわかる他地域とのつながり～

野を越え山を越え、そして海を渡り、私たちの祖先は、私たちが思い描くよりもずっと昔から広い範囲で行き来し、伝統を守りつつ新しい文化を受け入れてきました。

今回は、北薩地域をはじめとする発掘調査の成果などをもとに、郷土の先人たちの足跡をたどっていきます。

よりよい素材を求めて

ナイフやスコップなど、現在のように便利な道具がなかった時代に、人々は木や石など身近にある素材をうまく使って、生きていくために必要な道具を作っていました。

しかし、交易によって身近なものより良い素材があることを知ると、人々はより良い素材を求めて、遠くへ行動範囲を広げていったようです。

黒曜石がもたらすつながり



大原野遺跡（薩摩川内市）出土の石器と原産地の黒曜石

おほらの
大原野遺跡は、薩摩川内市の南部に所在する遺跡です。平成8、9年度の発掘調査の結果、石鏃や石槍などの石器が多く出土しました。石材は黒曜石が多く、鹿児島県では伊佐市などで採ることができます。

しかし、出土した石器を分析した結果、西北九州を原産地とする石材もあることが分かりました。身近な伊佐市で採れる石材よりも質の良いものですが、直線距離でおよそ200kmも離れた場所で採れる石です。いったいどんなルートをとったのでしょうか。

不易流行（滑石を含んだ土器）

出土した土器を見ると、それぞれ時代や地域によって似たような形や文様の土器を作っていることが分かります。しかし、時間の流れとともに、少しずつ土器の形や文様が変化しています。

遠く離れた地域との交易によって新しい形や文様が入り入れられてきたようです。



かきうち
垣内遺跡（出水市）などの滑石を含んだ土器

展示資料データ	遺跡数	展示資料数	展示パネル数
	31	240(一括展示含む。)	70

焼き物技術の向上

1 須恵器の登場

土器の焼成は、人類が最初に応用した化学変化であり、縄文土器、弥生土器、土師器等の素焼きの土器から、須恵器などの炆器、釉薬のかかる陶器、磁器へと進化・向上していきます。また、焼き方も野焼きから窯焼きへと、他地域の先進技術を導入しながら発展してきました。このようにして生産された焼き物は、人々の生活の様々な場面で使われてきました。

須恵器は、古墳時代中頃（5世紀中頃）以降、朝鮮半島から技術が伝来した焼き物です。山の斜面に穴を掘って作った窯で1,100度以上の還元焰で焼成（焼き上げる時に酸素を供給しない焼き方）します。色は青灰色のものが多く、釉薬はかけていません。

その中でも、古墳時代に陶邑窯跡群※で焼かれたものは、「初期須恵器」と呼ばれています。指宿市に所在する南摺ヶ浜遺跡では、初期須恵器と考えられる遺物が出土しています。

※ 陶邑窯跡群

さかい い すみ おおさかさやま きゅうりょうち
堺市・和泉市・大阪狭山市にまたがる丘陵地一帯に広がる、古墳時代から平安時代までの須恵器などを焼成した国内最古・最大規模の窯跡群で、『日本書紀』崇神天皇七年八月条には、「茅渟縣陶邑」の地名も見られます。



南摺ヶ浜遺跡（指宿市）出土の壺など

2 須恵器の生産

【岡野窯跡群】

岡野窯跡群は、伊佐市菱刈町に所在する古代の須恵器を焼いた窯跡です。昭和57年、林道の工事中に見られました。工事によってかなり破壊されていましたが、5基ほどが存在したものと推定されました。うち4基の発掘調査が行われ、8世紀末から9世紀前半にかけて、杯、碗、鉢、盤、壺、甕が作られていたことが分かりました。



岡野窯で焼かれた可能性のある須恵器



南摺ヶ浜遺跡（指宿市）の出土遺物

【南摺ヶ浜遺跡】

弥生時代後期から古墳時代中頃の埋葬遺跡です。出土品の多くは、亡くなった人を葬る際に使用するもので、棺やお供えに使用した壺、甕、鉢、高坏などが、ほぼ完全な形で出土しました。また、鉄製の剣や矢じりの先端部も多く出土しました。この遺跡は、南九州の古墳時代における葬送儀礼（人が亡くなったときに行う儀式など）を知る上で大変重要な遺跡で、平成26年4月22日に、県の有形文化財に指定されました。



岡野窯跡群（伊佐市）近景

3 磁器の生産

平佐焼などのように、白色の陶石を原料とする焼き物は、「磁器」と呼ばれます。

18世紀後半に入り、天草陶石の流通が安定してくると、全国各地で磁器生産が盛んになります。薩摩藩でも、平佐焼窯跡群をはじめ、重富皿山窯跡（始良市始良町）、日木山窯跡（始良市加治木町）、南京皿山窯跡（日置市東市来町）で、天草陶石を使用していることが分かりました。

【平佐焼】

薩摩川内市の平佐焼は薩摩焼の一つです。江戸時代中頃の1776年、平佐郷の今井儀右衛門が焼き物の盛んな肥前の有田（今の佐賀県有田町）から焼き物を作る職人を招いて、脇本窯（阿久根市）を開いたのが始まりです。

しかし、数年で失敗し、その後、平佐郷の領主である北郷家の家老・伊地知国右衛門が領主の北郷久陣に頼み、再び肥前から職人を呼んで、平佐に窯を開いたことから「平佐焼」と呼ばれるようになりました。



平佐焼伝製品（薩摩川内市川内歴史資料館蔵）

4 大陸との交流

中世の交易は、私たちが考えるよりも、はるかに広い範囲で行われていました。現代の長距離輸送は、トラック輸送・船舶輸送・航空輸送といった陸・海・空の手段によってなされています。

中世の輸送手段は馬・船などによる輸送で、陸・海の二種類でした。現代とは異なり、長距離輸送は船舶輸送が主でした。このことは全国各地の中世の遺跡から、海を隔てた中国からの輸入陶磁器が大量に出土することからも理解できます。

鹿児島島の遺跡からも、中国の各地で焼かれた陶磁器がたくさん出土しています。



薩摩藩の磁器窯跡

【日木山窯跡】

日木山窯跡は、始良市加治木町に所在し、江戸時代（幕末頃）に、天草の陶石を原料にして磁器を生産した窯の一つです。文献等により、南京皿山窯（苗代川（日置市東市来町）の磁器窯）と平佐焼窯場から職人を招いたことが分かっており、発掘調査の結果、窯跡は発見できませんでしたが、日木山窯のものと思われる磁器が大量に見つかり、文様や製品の形など平佐焼や南京皿山窯との共通性が見られることが分かりました。



しばはら 芝原遺跡（南さつま市）や天神段遺跡（大崎町）などで出土の青磁皿・碗